

平成11年度病害虫発生予報

第5号（8月予報）

平成11年7月27日
津軽地域病害虫防除所
南部地域病害虫防除所

【概要】

水稻では、アカヒゲホソミドリメクラガメが津軽地域で多いと予想される。
りんごでは、斑点落葉病が全県的にやや多く、ギンモンハモグリガが全県的にや
や多いと予想される。
りんご以外の落葉果樹では、ぶどうの晩腐病が全県的にやや多いと予想される。
畑作・野菜では、きゅうりのうどんこ病が全県的にやや多いと予想される。

《発生が多くなると予想される病害虫》

水 稲	アカヒゲホソミドリメクラガメ（津軽地域）
-----	----------------------

《発生がやや多くなると予想される病害虫》

り ん ご	斑点落葉病
	ギンモンハモグリガ
ぶ ど う	晩腐病
き ゆ う り	うどんこ病

病害虫に関する問合せ先

津軽地域病害虫防除所	電 話	F A X
南部地域病害虫防除所	0172(52)9500	0172(53)3717
	0176(23)4290	0176(20)1167

1 水稻

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発 生 量	
穂いもち	県内全域	やや早い	平年並	出穂期は平年より早い見込みである。 葉いもちの発生が平年並であった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
紋枯病	県内全域	-	平年並	初発の確認は平年より早かった。 前年の発生量は平年よりやや少なかった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
ごま葉枯病	県内全域	-	平年並	7月の発生は一部で多いところもあったが、概ね平年並であった。 8月の気温は平年並の見込みである。
セジロウウンカ	県内全域	-	やや少ない	7月の飛来数が平年よりやや少なかった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
ヒメトビウンカ	県内全域	-	平年並	すくい取り調査における発生量は平年並であった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
コバネイナゴ	県内全域	-	平年並	ほ場での発生時期は早かったが発生量は平年並であった。
フタオビコヤガ	県内全域	(第3世代 幼虫ふ化 盛期) やや早い	平年並	予察灯による第1世代成虫の誘殺時期は、平年並～やや早かった。 7月の気温が高く経過した。 予察灯による第1世代成虫の誘殺数は平年並であった。
ニカメイガ	県内全域	-	平年並	前年の発生量は平年並であった。
アカヒゲホソミドリメクラガメ	津軽地域	(第3世代 成虫) やや早い	多 い	予察灯による第1世代成虫の誘殺時期は、平年よりやや早かった。 予察灯による誘殺数は津軽地域では多く、南部地域では平年並であった。
	南部地域		平年並	津軽地域では雑草でのすくい取り数が、多い地点があった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。

(1) 防除のポイント

出穂期が大幅に早まっており、7月中に出穂期になるところもあるので出穂直前の防除時期が早まっている

《8月の防除作業》

7月6半旬	1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬
出穂直前 / 出穂期 / 穂揃期 / 傾穂期					

穂いもち	穂いもち	穂いもち	カメムシ類
紋枯病	紋枯病	カメムシ類	
ごま葉枯病	ごま葉枯病		
コバネイカゴ	ウソカ類		
ウンカ類	カメムシ類		
フタオヒ・コヤカ			
ニカメイカ			

注：印は必ず防除する。
印は発生状況に応じて防除する。

【穂いもち】

防除は、出穂直前と穂揃期（直前散布後7日目頃）の2回必ず実施する。

葉いもちの発生が多いほ場や抵抗性の弱い品種を作付しているほ場では、穂揃5～7日後にも薬剤を散布する。

葉いもちの発生が少ないほ場でも出穂期前後に降雨が続くと、穂いもちが多発する所以があるので、防除適期を失しないように注意する。なお、降雨が続くような場合であっても、雨の合間をみて散布する。粉剤は多少降雨があっても散布する。

出穂が長引いた場合、穂揃期に達しなくても出穂直前散布後7日目頃には農薬を散布する。

【紋枯病】

通常、出穂直前の1回散布でよい。

例年、発生の多い水田では穂揃期にも散布する。

バリダシン剤、バシタック剤、モンカット剤、モンガード剤は疑似紋枯病（赤色菌核病、褐色菌核病）も同時防除できる。

【ごま葉枯病】

発生の見られるほ場では、出穂直前と穂揃期に本病害にも有効な穂いもち防除剤により同時防除する。

航空防除実施地区で本病の発生が見られる場合は、地上防除で対応する。

【コバネイナゴ】

出穂期前後の農薬散布の際に本種にも効果の高い殺虫剤を含む殺虫・殺菌混合剤を散布し、他病害虫と同時防除する。

本種に効果のある殺虫剤は、オフナック、トレボン、カルホス、バッサ及びMr.ジョーカーであるが、バッサについては、本種に対する防除効果の低下している地域があるので使用に当たっては十分注意する。

本種は移動・分散が激しいので、広域一斉防除に努める。

【セジロウンカ】

発生量はやや少ない見込みであるが、全般には出穂直前または穂揃期の殺虫・殺菌混合剤の散布で他病害虫と同時防除できると思われる。しかし、例年局地的に多発することがあるので、そのような地区では、穂揃後も防除が必要となることがあるので発生に注意する。

8月上～中旬に飛来し、多発することもあるので、今後発表する予察情報に注意し、適期防除に努める。

【ヒメトビウンカ】

発生初期にセジロウンカなどと同時防除するが、スミチオン剤、マラソン剤は本種に対する効果が劣るので別な薬剤を使用する。

【ニカメイガ】

全般に発生は少ないが、前年の発生が目立ったほ場では、出穂10日前に連続50株5か所程度を調査し、被害株率が4%以上の場合には、出穂10日前と出穂初め～出穂期の2回防除する。被害株率が4%未満の場合には、出穂初め～出穂期に1回、他病害虫と同時防除する。

【フタオビコヤガ】

出穂直前または穂揃期に穂いもち、セジロウンカ、コバネイナゴなどと同時防除する。

【カメムシ類】

本年はアカヒゲホソミドリメクラガメの発生が多く、斑点米の発生が懸念される。発生が多い地帯では、穂揃期から7～10日ごとに3回、次のいずれかを散布する。

スミバッサ粉剤20DL
バイバッサ粉剤DL
トレボン粉剤DL
スミチオントレボン粉剤DL
MR.ジョーカー粉剤DL

出穂期が近づいてからの草刈りはカメムシ類を水田内に追い込むので少なくとも8月中は草刈りを控える。

アカヒゲホソミドリメクラガメやアカスジメクラガメは割れ粉を選好して加害するため、割れ粉の多い場合は特に注意する。

【その他の病害虫】

ばか苗病の発生は全般に少ない見込みであるが、徒長あるいは枯死した罹病株がみられる場合は、罹病株を出穂前に抜取り、土中に埋めるか焼却して、出穂後の粉への感染を防止する。

長距離移動性害虫であるコブノメイガの飛来は、今のところ確認されておらず、発生量は少ないものと思われるが、8月上～中旬に飛来し、多発することがあるので、今後、発表する予察情報に注意し、適期防除に努める。

(2) 防除上注意すべき事項

当該ほ場の防除対象となる病害虫を見極め、同時防除により効率化をはかる。いもち病が多発して、散布回数が多くなり、散布間隔も5日毎位に短くする場合には次の点に注意する。

同一農薬を連用すると、耐性菌が出現する恐れがある。また、同一農薬の散布間隔は、農薬残留の点からも7日以上としなければならない。したがって、異なる農薬を組み合わせて防除する。

2 りんご

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
斑点落葉病	県内全域	-	やや多い	7月の発生量は平年並であった。 デリシャス系などのり病性品種では多発園が散見されている。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
リンゴコカクモンハマキ	津軽地域	やや遅い (第2世代幼虫発生盛期)	平年並	7月の幼虫発生量は平年並であった。 成虫の発生が平年に比べやや遅く経過している。 8月は気温が平年並の見込みである。
	南部地域	やや早い (第2世代幼虫発生盛期)	少ない	7月の幼虫発生量は平年に比べ少なかった。 成虫の発生が平年に比べやや早く経過している。 8月は気温が平年並の見込みである。
リンゴモンハマキ	南部地域	やや早い	少ない	7月の発生量は平年に比べ少なかった。 成虫の発生が平年に比べやや早く経過している。 8月は気温が平年並の見込みである。
ギンモンハモグリガ	県内全域	-	やや多い	7月の発生量は平年に比べやや多かった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
リンゴハダニ	県内全域	-	平年並 (一部でやや多い)	7月の発生量は平年並であったが、一部でやや多かった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。
ナミハダニ	県内全域	-	平年並	7月の発生量は平年並であった。 8月は気温、降水量が平年並の見込みである。

* その他の病害虫

クワコナカイガラムシは一部で発生の多い樹が見られる。
モモシンクイガは平年並に少ない見込みである。

(1) 防除のポイント

【斑点落葉病】

8月上旬にアリエッティC水和剤又はベフラン液剤を散布する。

8月下旬にアリエッティC水和剤を散布する。

急増の恐れがある場合は、基準薬剤にポリオキシンAL水和剤又はロブラー水和剤を加用する。両薬剤は薬剤抵抗性の懸念があるので、同一薬剤の連続散布を避ける。

不要な徒長枝は剪去する。

【 褐斑病 】

前年の発生が多かった園地では、8月上旬の基準薬剤にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を加用する。

【 ハマキムシ類 】

発生の多い所では、8月上旬に防除剤を散布する。7月下旬にピレスロイド剤を使用した場合は、8月上旬のハマキムシ防除剤は省略できる。

コカクモンハマキ防除剤は薬剤抵抗性の懸念があるので、同一薬剤の連続散布を避け、他の害虫防除も含めて年間の使用回数をできるだけ少なくする。

8月以降、発生が多い場合は果実に接触している葉を早めに摘み取る。

【 ギンモンハモグリガ 】

幼虫の下垂最盛期の10日後頃に同時防除できる殺虫剤を選択する。

【 クワコナカイガラムシ 】

発生の多い樹を対象として、8月上旬に有効な薬剤で胴木洗いを行う。

【 ハダニ類 】

園地を見回り、発生状況に応じて適宜ダニ剤を加用する。散布の目安は、園地全体で1葉当たりのハダニ成虫数が2個体以上（成虫、若虫、幼虫を含む）、あるいは寄生葉率50%以上である。

ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので同一薬剤の連続散布は避け、できるだけ年1回の使用にとどめる。なお、ピラニカ水和剤とマイトクリーンフロアブルは同一薬剤とみなし、どちらか一方を選び、年1回の使用にとどめる。

オサダン水和剤、オマイト水和剤の適正使用基準が次のように変更となったので注意する。

薬剤名 倍数	旧		新	
	使用時期	使用回数	使用時期	使用回数
オサダン水和剤 1000	収穫14日前まで	2回以内	収穫21日前まで	2回以内
オマイト水和剤 750	収穫30日前まで	2回以内	収穫14日前まで	1回

3 りんご以外の落葉果樹

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 晩腐病	県内全域	-	やや多い	前年の発生量は平年に比べ多かった。 8月の降水量は平年並の見込みである。
(ぶどう) 褐斑病	県内全域	-	平年並	前年の発生量は平年並であった。 8月の降水量は平年並の見込みである。

(1) 防除のポイント

ぶどう

【 晩腐病、褐斑病 】

8月上旬に、キャンベル・アーリーではサニバー水和剤を、スチューベンではベンレート水和剤を散布する。

園地内の排水や通風を良くし、過湿にならないようにする。

西洋なし

【 輪紋病 】

キャプタン・有機銅剤、キノンドーフロアブル、ベフキノン水和剤、ストロビードライフロアブル、ベルクート水和剤のいずれかを10日おきに散布する。なお、ベルクート水和剤は「ル・レクチエ」にさび果を生ずるので使用しない。また、ストロビードライフロアブルはおうとうに薬害があるのでからないようにする。

4 畑作・野菜

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(きゅうり) べと病	県内全域	-	やや少ない	7月の発生量がやや少なかった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(きゅうり) 斑点細菌病	県内全域	-	平年並	7月の発生量が平年並だった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(きゅうり) うどんこ病	県内全域	-	やや多い	7月の発生量が平年よりやや多かった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(すいか) つる枯病	県内全域	-	やや少ない	7月は発生が見られていない。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(メロン) つる枯病	県内全域	-	やや少ない	7月は発生が見られていない。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(トマト) 疫病	県内全域	-	やや少ない	7月は発生が見られていない。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内全域	やや早い 産卵盛期	やや少ない	第1世代成虫の誘殺が平年より早く認められている。 巡回調査による第1世代卵・幼虫の発生量が平年よりやや少なかつた。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(アブラナ科野菜) コナガ	県内全域	-	平年並	7月の発生量が平年並だった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(だいこん) キヌシノミムシ	県内全域	-	平年並	7月の発生量が平年並だった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(ねぎ) さび病	県内全域	-	やや少ない	7月の発生量が平年よりやや少なかつた。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(にんじん) 黒葉枯病	県内全域	-	平年並	8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(ながいも) アブラムシ類	県内全域	-	平年並	7月の発生量が平年並だった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。
(ながいも) ヤマノイモガ	県内全域	-	平年並	7月の発生量が平年並だった。 8月の気温、降水量が平年並の見込みである。

(1) 防除のポイント

きゅうり

【ベと病】

気温が20℃前後で多湿、肥料切れのときに発生しやすい。

敷わらを早めに行い、雨滴の飛散を防ぐ。

発病初期から5~7日毎に、下葉や葉裏にも十分付着するように薬剤散布する。

発病が激しいときは3日毎に散布する。

【斑点細菌病】

雨が多いなど多湿条件で多発しやすい。

被害茎葉は集めて焼却する。

発生初期から数回、薬剤を散布する。

【うどんこ病】

露地栽培では例年8月頃から発生が目立つてくる。また、窒素肥料が多いと発生が多くなる。

ブルームレス台木の接ぎ木きゅうりは、うどんこ病の被害が激しいので注意する。

被害茎葉は集めて焼却する。

発生初期から5~7日毎に薬剤を散布する。また、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミルカーブ液剤、トリフミン水和剤及びルビゲン水和剤は耐性菌が出やすいので、単独で使用しないようにする。

すいか、メロン

【つる枯病】

連作されている畑や、雨続きで湿度が高い状態が続くと発生が多くなるので注意する。

発生が見られたら、5~7日おきに次表のいずれかの薬剤を散布する。

耐性菌の出現を防ぐために、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

メロンでは、ポリオキシンAL水溶剤の50倍液を病斑部が隠れるように全体に塗布する。

《防除薬剤一覧表》

薬剤名	倍数		使用時期	使用回数
	すいか	メロン		
ダイファード水和剤	400	400	収穫30日前まで	3回以内
ダコニール ¹⁰⁰⁰	700	1,000	収穫3日前まで	5回以内
ロブラン水和剤	1,000	1,000	収穫前日まで	4回以内
マンゼブ水和剤	600	400~600	収穫7日前まで	すいか7回以内 メロン5回以内
ポリベリン水和剤	1,000	1,500	収穫前日まで	メロン5回以内
スクレターン水和剤	500	-	収穫21日前まで	5回以内
ジマシングレント水和剤	400~600	-	収穫21日前まで	5回以内
スミブルー水和剤	2,000	-	収穫21日前まで	5回以内
ベルクート水和剤	1,000	-	収穫前日まで	4回以内
ストコニア水和剤 ¹⁰	2,000	-	収穫前日まで	3回以内
ポリオキシンAL水溶剤	-	400~600	発病初期	6回以内
		50		1回

注) 敷用量: すいか 10a当たり150~300リットル。

メロン 10a当たり200~300リットル。

[マンゼブ水和剤]: ジマンダイゼン水和剤、ベンコゼブ水和剤

トマト

【疫病】

多雨、多湿のときに発生しやすい。

敷わらを施すなどして、泥が付着するのを防ぐ。

被害茎葉は集めて焼却する。

薬剤を約7日おきに下葉や葉裏にもていねいに散布する。

《防除薬剤一覧表》

薬剤名	倍数	使用時期	使用回数	同時防除で る病害
ダイフード水和剤	400	収穫前	3回	斑点病
ジマシンド水和剤	800	前	2回	葉かび病
ジジンコスダリセイフバーフル	800	前	3回	葉かび病
フェスピスダクターセイフバーフル	1,000	前	2回	葉かび病
ビロフダクターセイフバーフル	750	前	2回	葉かび病
エスフライコリサリードラムボルドー	800	前	2回	葉かび病
フタクサリンドミンボルドー	400~600	前	3回	葉かび病
アーヴィング	1,000	前	2回	葉かび病
アーヴィング	500	前	2回	葉かび病
アーヴィング	1,000	前	2回	葉かび病
アーヴィング	1,000	前	2回	葉かび病
アーヴィング	500	前	2回	葉かび病
アーヴィング	400	前	2回	葉かび病
アーヴィング	500	前	2回	葉かび病
アーヴィング	400~800	-	-	輸出病、葉かび病
アーヴィング	400~600	-	-	斑点細菌病
硫酸銅	-	露地: 収穫前日 施設: 収穫10日前	5回	斑点細菌病
コサイドボルドー	1,000	-	-	斑点細菌病

注) 散布量: 10 a 当たり 200~300 リットル。

[銅剤]: ドイツボルドーA、クプラビットホルテ 500倍

ドウェット 400~500倍、ハイボルドウ 250~500倍

アブラナ科野菜

【コナガ、ヨトウガ】

定植間もない株に発生すると被害が大きいので、定植時にオルトラン粒剤、オングル粒剤5、ガゼット粒剤、モスピラン粒剤、リゲノン粒剤のいずれかを植穴施用し、初期密度を下げる。

コナガ、ヨトウガとも幼虫は老齢になると薬剤の効果が劣るので、若齢のうちに防除する。

コナガは殺虫剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

同時に発生するモンシロチョウ(アオムシ)、ウワバ類との同時防除を考慮して効率的な防除を行う。

だいこん

【キヌジノミハムシ】

は種前に、次のいずれかを播溝に土壤混和する。エチルチオメトン粒剤、ステッド粒剤はアブラムシとの同時防除ができる。

ガゼット粒剤 6 kg(10 a 当たり)は、は種覆土後、土壤表面に作条散布する方法もある。

発生が多い場合には、発芽後ディブテレックス乳剤1,000倍液を100リットル(10 a 当たり)散布する。

《防除薬剤一覧表》

薬剤名	使用量(kg/10a)
エチルチオメトン粒剤	3~4
ステッド粒剤	4
ガゼット粒剤	4
オングル粒剤	5
ガゼット粒剤	6
ガゼット粒剤	6

[エチルチオメトン粒剤]: ダイシストン粒剤、エカチンTD粒剤

ねぎ

【さび病】

発病初期から10日おきくらいに次のいずれかを散布する。

マンゼブ水和剤、ダイファー水和剤は、ベと病及び黒斑病を同時防除できる。

ストロビーフロップルは葉枯病、ベと病を同時防除できる。

サプロール乳剤は幸水系及び晩三吉などのはなしにはごく微量で薬害の恐れがあるので注意する。
展着剤は湿展性のよいものを使う。
被害茎葉は集めて焼却する。

《 防除薬剤一覧表 》

薬剤名	倍数	使用時期	使用回数
バイレトン水和剤5 バイレトン乳剤	600 1,000	収穫14日前 収穫14日前	3回 2回
ダインファーワー水和剤	400	収穫21日前	3回
マンゼブ水和剤	600	収穫30日前	5回
サンブロール乳剤	800 ~ 1,000	前日	3回
ラリストロピニフルアブル	2,000	収穫7日前	3回
アミスター20フルアブル	2,000 2,000	収穫7日前 収穫3日前	3回 3回

注) 散布量: 10 a 当たり 150 ~ 200 リットル。
[マンゼブ水和剤]: ジマンダイセン水和剤、ベンコゼブ水和剤

にんじん

【 黒葉枯病 】

多発生となってからでは防除効果が期待できないので、早期発見に努め、発生が見られたら直ちに下記のいずれかを 7 ~ 10 日おき位に数回散布する。

降雨が数日続くような場合、発生が多くなる恐れがあるので、予防的な防除を徹底する。

肥切れしたときに多発しやすいので適正な肥培管理を行う。

《 防除薬剤一覧表 》

薬剤名	倍数	使用時期	使用回数
ボリオキシンAL水和剤 Zボルドー	500 500	収穫30日前	5回以内
コサイドボルドー	1,000	-	-
コサイドDF	1,000	-	-
ボリベリン水和剤	1,500 ~ 2,000	収穫30日前	5回以内
ロブラー水和剤	1,000	収穫14日前	4回以内
ベルクート水和剤	1,000	収穫14日前	5回以内
ダコニール1000	1,000	収穫7日前	5回以内

注) 散布量: 10 a 当り 150 ~ 200 リットル。

ながいも

【 アブラムシ類、ヤマノイモコガ 】

アブラムシ類は、吸汁による直接害のほか、ウイルス病を伝搬することがあるので、発生初期からの防除を徹底する。ヤマノイモコガは、アブラムシ類と同時防除できる。

8月の病害虫テレホン情報案内

(津 軽 地 域)

電 話 0172(53)0033

月	旬	水 稲	果 樹	畑作・野菜
8	上	出穂期前後の防除	斑点落葉病とハマキムシと ハタニの防除	トマトの疫病の防除
	中	穂いもち等穂揃期の 防除	斑点落葉病とハダニ の防除	にんじんの黒葉枯病 の防除
	下		斑点落葉病の防除	ねぎの病害虫防除

(南 部 地 域)

電 話 0176(24)0088

月	旬	水 稲	果 樹	畑作・野菜
8	上	8月病害虫発生予報について		
	中	穂いもちの防除	りんご斑点落葉病と ハダニ類の防除	きゅうりの病害虫の 発生状況と防除
	下		りんごすす斑病とす す点病の防除	キャベツのヨトウガ とコナガの発生状況 と防除

なお、テレフォン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。

- 青森県農薬危害防止運動を実施中 -

運動実施期間 平成11年6月15日～8月14日

農薬の取り扱いを誤ると人や家畜、蚕、ミツバチ、水産動植物や周辺環境に何らかの影響を及ぼす恐れがあります。

農薬を使用する場合は、農薬の使用基準を良く守り、農薬による事故を無くしましょう。また、病害虫の発生予察情報等を参考にしながら、必要最小限の農薬を使用し、環境にやさしい農業を推進しましょう。

農薬散布に当たっては、次の事項に注意しましょう。

散 布 前

ラベルを良く読む。

農薬の容器には、使用方法、使用上の注意などが書かれているので、使用前に良く読む習慣をつける。

ホースの接続部分などが不良でないか等、防除器具や防除施設の点検をする。

農薬用マスク、保護メガネ、手袋等の防護具を着用する。

過労や病気がありなど健康状態が悪い場合は作業をしない。

散布地域の水道や河川の汚染を防止し、住宅や通行人、家畜、蚕等に被害を及ぼさないよう危害防止に努める。

散 布 時

散布作業は、風の強くない、朝夕の涼しい時間を使い、2～3時間ごとに交替して行う。

温室やビニルハウス等の敷地内で散布する場合は、施設内に農薬がこもり、作業者の体に着いたり吸入の危険があるので、服装を厳重にしたり専用の防毒マスクを着用する。

土壤くん蒸剤を使用する場合は、薬剤が揮散して周辺に影響を与えないよう風向きなどに十分注意するほか、被覆を完全に行う。

散 布 後

作業後は、手足はもちろん全身を石けんでよく洗うとともに、眼を水洗し衣服を毎日取り替える。

農薬は、安全な場所に鍵をかけて保管する。特に、臭化メチルなど揮発性の高い農薬は、住居や隣接する建物に保管しないようにする。

農薬の誤飲を防ぐため、清涼飲料水の空容器などに移し替えない。

農薬は全て使いきるようにし、余った場合、不法に廃棄しない。空容器、空袋等は、関係法令等をよく守り、廃棄物処理業者への処理を委託するなど適正に処理する。（野焼きや不法投棄は止めましょう）